

新潟県

2014 / Oct

妙高市立姫川原小学校

全校算数

『学び合い』



心をつなぎ

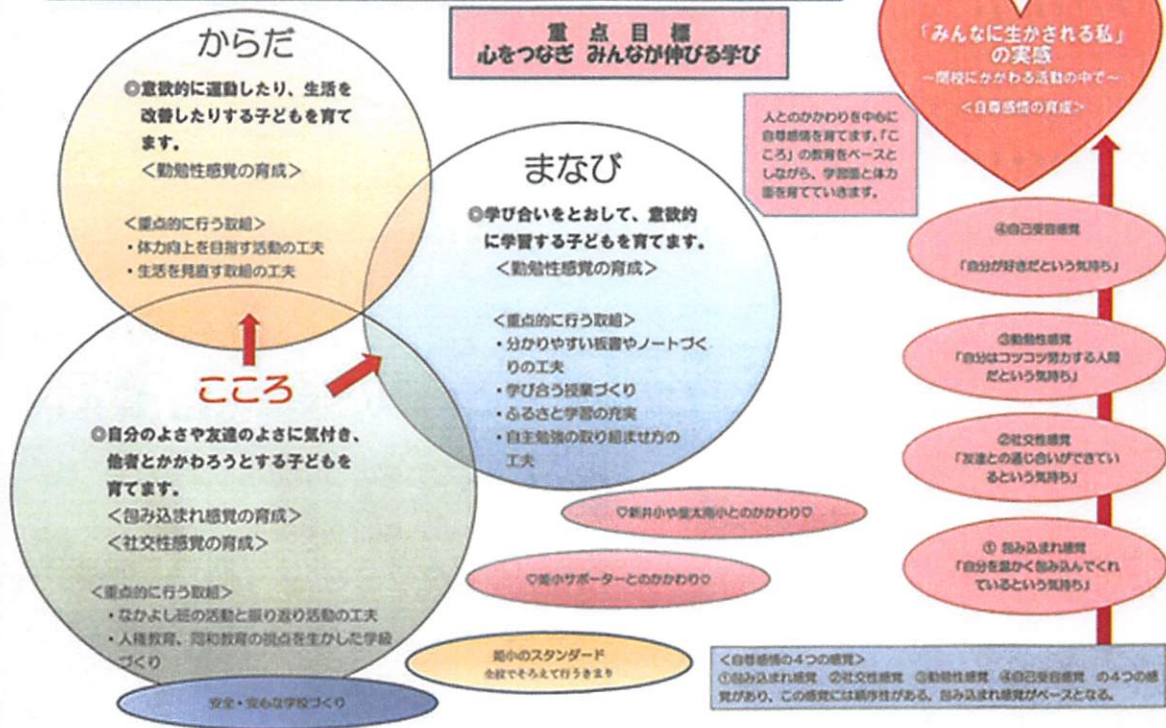
みんなが

伸びる学び

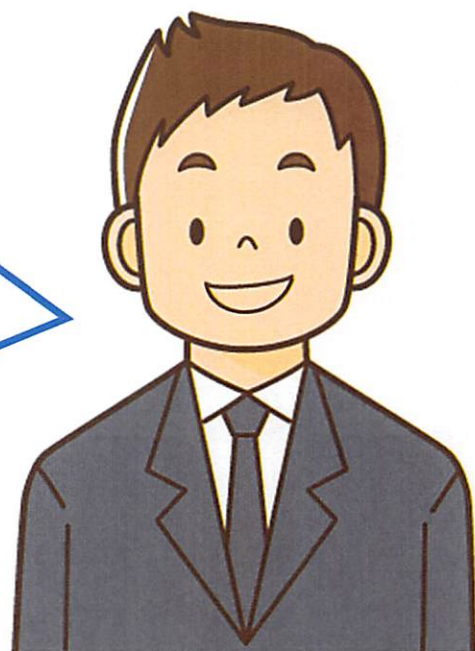
今年度 グランドデザイン

平成26年度 妙高市立姫川原小学校 グランドデザイン

<教育目標> 豊かな心を持ち、意欲的に学び、たくましく生きる子ども



この冊子は、
 姫川原小学校の全校児童
 が一堂に会して算数の授業
 を行う「**全校算数**」の
 2年間の歩みを取り
 上げています。





『つなぐ』の精神が生きる挑戦の成果

姫川原小学校 校長

荒川 吉子

■思考力・表現力を鍛える教室をつくらう

学校の玄関にこの一年「繋ぐ」の文字を掲げてきた。自尊感情の育成を目指し、心を繋いだ先にある今年のゴールが「みんなに生かされる私」であったからだ。

学校課題の解決は、学級づくりをベースにした授業改善と直結する。そこで、一人の発言から、相手の気持ちを想像して思いを返す。まさに心の言葉のリレーである。まずは相手と同じ言葉を繰り返し返すことでいいのだ。思考力・表現力を鍛える教室をつくるために、そのレベルからのスタートであった。

◆子どもがつなぐ……思考力・表現力をいかす「学び合い」に全校で挑戦しよう

挑戦の中身は、説明力の育成である。表現力を鍛える中で、自分の考えや友達のことを説明することに絞った。その場の設定が、全校が一同に集って学ぶ「全校算数」である。学年を超えた学びの中で、「繋ぐ」の精神は大きな発揮の機会となった。

教師は思考力を育てる課題づくりに力を入れた。その課題を自ら解決したいと思った時、その子にとっての「問い」が変わる。「えっ、何でそうなるの？」そのやり取りが学年を超えて広がっていった。学力向上には様々な学習教材の活用効果はある。しかし、何よりも最大のツールは子ども自身がつないだ「人」であることを再認識した。

◆教師がつなぐ

思考力・表現力を鍛える場として「対話」を大切にクラス算数を目指した。子どもの考えを繋いで授業をコーディネートする力が求められる。市教委指導主事の指導の下、行った研究授業後の授業者の気づきを拾ってみる。【5年 既習の技能が影響大、課題以前の実態把握の大切さを知る。⇒4年 情報不足の課題提示により学級全体の課題となる。⇒2年 ワークシートと板書が同じことで思考を促す。⇒6年 練り上げとは単なる発表会の場で終わらないものに。⇒3年 説明を書く時だけでなく話す時も用語を使う。⇒1年 間違えた理由を皆で考え練り上げる。】先の実践を十分踏まえた上で、さらなる対話の姿を求め、職員は授業実践を重ねていった。

◆本気を示す大切さ

全校算数では、導入に子どもの目指す姿を教師が輪番で話をする。それは「君たちが～できるようになる」という教師としての決意表明ともとれる。1分1秒無駄なく動く子どもたちの集中力はすごい。39分もあつという間だ。学習意欲を育む場としても機能した全校算数には、教師の本気度が子どもを変えたと思う。先輩教師のエキスを活かし次々とリレーされた教師の語りは、子どもを本気にさせていった。

◆感謝……挑戦の蔭に西川教授を始め、院生の親身な指導・支援があり、大きな後押しとなった。

学校便り

2013年9月号

校長作成

教えながら
相手を意識した
最善の説明を
考え出していきます。

■教え上手は、説明上手

実は、教師より子どもの方が説明上手なんです。ミニ先生ぶりに感心させられることが多くあります。子ども同士の分かり合える世界があるようです。答えを教えるのではなく、ちゃんと考えさせていくのです。その子に合った説明の仕方をどんどん工夫していきます。相手が納得すると、「じゃ僕に言ってごらん」と、聞き役に回ります。



■つながる心 広がる学び

素晴らしい説明を他の友達に早速紹介させます。

「なるほど」と、より速く正確に解ける考え方がどんどん広がっていきます。

仲間との交流は、別の考え方に気付かせてくれる学び合う場にもなります。



♥がんばったね うれしいよ♥

(OOさんの感想)

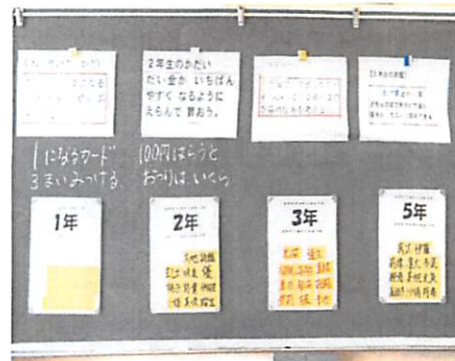
最初は、1年生にどう教えていいか悩んだけど、どんどんやっていく

内にこつがつかめてきた。最初、分かっているのかどうか、つかめなかったけれど、相手から反応がどんどん出てきて、最後に完全に分かってくれた時は本当にうれしかった。



●最後は必ずふり返り

今日分かったことをまとめたり、友だちとのかかわりを振り返ったりします。



■環境づくり その1

各学年の課題を表示することで、子どもも教師も課題が共有できます。

■環境づくり その2

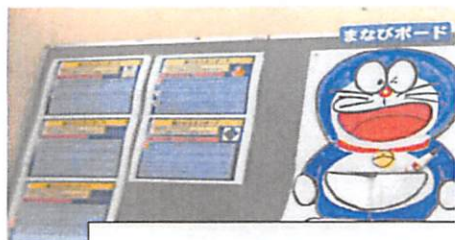
一人一人に名前の磁石を用意しました。課題が終了すると、磁石を白から黄色にひっくり返します。

* 7月の最後に初めて全員合格でき、みんなで大喜びの瞬間を味わいました。その喜びがまた次への意欲をかきたてていきます。



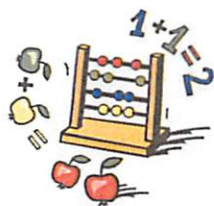
■環境づくり その3

大きなカード、九九表、ブロック、ミニホワイトボード、電卓、子どもにとって必要となる説明道具を選択できるように用意します。



階段の掲示物です。校舎内が「学ぶ環境

全校算数を始めました



「みんなに生かされる

私」を目指して

木曜日の二限目は全校で算数をします。全校が学ぶスペースのある図書室に集まり、それぞれの学年の課題解決学習を同時にスタートします。学年を越えた人とかかわりの中で、全校のみんなが解決できることを目指して、学ぶスタイルです。始めたばかりで手探りの状態ですが、子どもたちの意欲を育てる場として機能し始めています。

子どもたちは
頭を寄せて
分かるまで
教え
学び合います。



■全員合格目指します

「みんなができる」ことを目標に進めています。自分の課題が終わった人から、どんどん動いていきます。



■分からないことは

はずかしくないよ
自分から進んで「〇〇が分からない」といえる子を育てています。一人で悩んでいないでいいのです。一人でも多くの人が分かることに喜びを見い出していきます。



教師は
かわり
興味をそそる
課題づくり
環境づくりに
がんばります。

学しゅうのやくそく

ひ人にわかるように大きなこえではっきりはなす
め目と耳でしっかりきく
が学しゅうじゆんびは はじめるまえに
わわたしのもの きめい、せいとん、たいせつに
ららくらくわかる ノートづくり

■説明力を目指した課題に

答えが分かっても、どうしてそうなったのか、自分で説明できて、初めて理解したと考えます。

当校の子どもたちに、欠けている「思考力」「説明力」をつけるための学ぶ場です。自分の考えをノートに図や式を使って書き、相手が納得できるよう説明することから始めます。

2,3年生のみんな

□□□□のカードを
ならべて、数をつくりましょう。

- ・いちばん大きい数
- ・いちばん小さい数
- ・3番目に小さい数

みんなで楽しく、学習しよう！

自主的ノート掲示板

になるよう努力しています。

全校算数の軌跡

姫川原小学校が、全校算数に取り組んで二年目を迎えました。

これまでの歩みをふり返し、子どもたちや教師たちにどのような変化・気づきが見られたのかをお伝えします。

はじめに

—現状—

平成27年度に閉校を控えている。
子ども、教師、地域が、1つにまとまる必要がある。

重点目標 「心をつなぎ みんなが伸びる学び」
→「みんなに生かされる私」の実現（自尊感情の育成）

★グランドデザインにおける〈努力事項〉は...
〈こころ〉—かかわりの中で自分のよさや友達のよさに気付く子どもを育てる。
〈からだ〉—かかわりの中で意欲的に運動したり生活を改善したりする子どもを育てる。
〈まなび〉—かかわりの中で意欲的に学ぶ子どもを育てる。 ←学びプロジェクトが提案する

「学びをつなぎ みんなが伸びる 算数の授業づくり —対話を生かして—」
→クラス算数と全校算数の実施

連携



子どもたちの思考力・表現力を育むこと、授業改善に努めることに重点を置き、全校体制で全校算数に取り組んできました。また本年度末の閉校を前に、子ども・教師・地域の心が一つにして「地域とつながる学校」づくりにも力を注ぎました。

全校算数とは・・・

『学び合い』（上越教育大学 西川 純 教授）の理念を取り入れ、「みんなが分かる」ことを目標に全校児童が一同に会して行う算数の授業

★かかわり方を学ぶことができる
★学習意欲を高めることができる
★思考力・説明力を育てたい

誰に聞いてもよい
何を使ってもよい
何を見てもよい

子どもたちは、本来、自分で解決する力をもっている。

教師は、子どもの発言やかかわりをコーディネートすることに徹する。



具体的な取組

学びプロジェクトとしての提案

→全校算数の運営方法を見直す 全体指導を輪番制で行う全校体制へ

目指す姿

- 問題の答えが導き出せても、やり方を説明することが苦手
- 小規模校特有の固定的な人間関係から、様々な友達に進んでかかわることが苦手
→思考力・表現力を向上させる子ども
- 授業中、子ども以上に話しすぎたり、指導が手厚すぎたりする傾向がある
- 子どものつぶやきや発言をコーディネートすることに難しさを感じている
→授業改善に取り組む教師
- 来年度の閉校を前に、子ども、教師、地域が、心を1つにする必要がある
- 学習参観やPTA総会など、学校への来校率が低い
→地域とつながる学校

具体的な取組

【連携】

- 学びプロジェクト部員**
—教育期ごとのプロジェクト部会（提案への協力・日々の運営についての相談）
- 各学年の担任**
—全体指導（語り）・課題づくり・評価（子どもの姿の見取り・アンケート）
- 支援プロジェクト**（上越教育大学教職大学院の院生3名）
—担任の負担感をとりながら新たな提案をすることへの**全面協力**
教室環境の準備、ボイスレコーダーによる発話記録・分析、課題作成へのアドバイス、授業支援、ノートの集計、アンケート集計・分析



過去の課題は
別のページで
紹介します！

具体的な取組

【課題づくり】

- 対話が生まれるもの
- 説明力が発揮されるもの

12/5 全校算数 2年生のかだい

九九パズルをかんせいさせて、数字をつかってわけをせつめいすることができる。説明することが目的

3年生のかだい

①教科書P.99の4の問題をやります。どうして、その数になるか理由を書きましょう。3年生全員が分かったら、みんなで、同じ先生の所にノートを持って来ましょう。

教科書P.99のれんしゅうをやりましょう。1は、漢字で書きましょう。

3年生のかだい

いろいろな長さを小數で表すことができる。

スリム化

1ねんせいのかだい

とけいを正しくよんだり、かいたりできる。

・プリントをやる。
・題の②は、「ながいはり」「みじかいはり」のことばをつかって、「1ねんせい1人」と、ほかのがくねん1人にせつめい、サインをもらう。

子どもの変容



全校算数の回数を重ねる
 たび、子どもたちの姿は変
 化していきました。相手に分
 かりやすいように教える工夫
 をしたり、全校達成するため
 に自ら動いていく姿が見ら
 れたいようになっていまし
 ました。また、全校算数は教え方
 を教える・教わる場ともなっ
 ています。

教師の変容

アンケート&インタビュー

校長から見た先生方の変容

「変わったことの一つには、先生方が（授業の最初の語りを）**繋いで広げて**いったこと。**先生方の良さを認め合う場**にも全校算数はなったんじゃないですかね。**課題を見通しを持って**作っている。院生さんに相談したり、研究主任にだしながらより**良く**している。**お互いに切磋琢磨**している。（教員の）**質的集団が高い**。最初、肯定的でない人もいた。でも、**すぐに拒否するのではなく、それぞれに良さがあるから、学んでいこう**っていう姿勢。」

教師の変容

アンケート&インタビュー

A教諭

「本当に**子ども同士で学べる**のかなと不安。」



「今は、はっきり言って、**ああ（子どもたち同士で）できる**んだな。と。」

B教諭

「**課題をつくる**時に、どのレベルにしていくなか悩んだ。」

「教師側が行ってよい支援、行わない方がよいことを知りたい。」



「夏休みに研修があった時、他の学年の出し方を見て、**授業の流れで課題を決めていっても良い**のなかってわかった。」



初期の職員研修より

全校算数
1年目の1学期

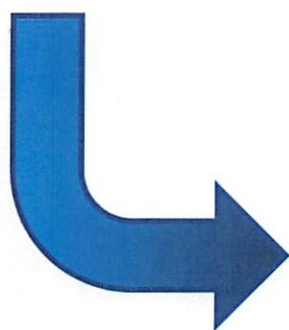
教員の生の声
をお届けします。

—課題(子どもの姿)—

- ・ ノートを見せるだけや、答えそのものを教えてしまう姿
- ・ 自分が課題解決しただけではなく、「皆ができる」「皆が分かる」への意識を高めること
- ・ ノートに書いてあっても、自分の言葉で説明ができない子
⇒ 良い教え方が分からないため、支援が必要?
- ・ 列ができるなど、答え合わせの方法が効率的でなかった
⇒ 答えを見て丸付けをする。子ども同士で答え合わせをする。
- ・ やりとりがなく、話が一方通行で終わる
⇒ 双方向でのやりとりが生まれる支援が必要?

—課題(課題づくり)—

- ・ 全校算数の課題はどんなものがよいか迷う。単学年と異学年合同によっても課題が変わるため、決めにくい
- ・ 子ども相互のかかわりを促すための課題の条件
- ・ 2学期に週1回の全校算数となるのなら、課題を考えていく必要がある。1時間に1課題では、進度的に他の4時間にしわ寄せが行く。
⇒ 参加については、1学期のように参加できるときに参加するという、流動的な方が無理がないのではないか?
- ・ **望ましい課題、姫小の全校算数のスタイルがはっきりしない**
⇒ 姫小の全校算数で**目指す子どもの姿**を明確にする
⇒ 目指す子どもの姿に迫るための「課題」を探る
EX) 多様な考え・意図的なつまずき・逆転現象への期待



—疑問・質問—

- ・ 「全校算数」は、算数であって算数でないのか? かかわり方を学ぶ場であり、算数の達成目標は、それに付随するものと捉えればよいのか?
- ・ 課題づくりのポイントは? (既習or未習)
- ・ 評価は、どのように行えばよいのか?
- ・ 教師が行うべき支援、行ってはいけない支援は何か?

子どもを見取り、

自らの行動を振り返り、

悩みや不安を抱えながらの1学期。

この積み重ねがあったからこそ、今の姫小がある…!

学びプロジェクト通信

学びプロジェクト通信

H25・5・23 学びプロジェクト

第1回全校算数の振り返り

①全校算数をやる意味は…???

- 全校だと、いろいろな姿が見られ、いろいろなやり方が出てくる。みんなで課題を達成する目標をもって一番行いやすいのが「算数」である。
- 他学年に説明したり、他学年に説明してもらったりする機会を得ることができる。低学年から「ありがとう」と言われた、下学年の説明の仕方の方が簡単で分かりやすかった、同学年の友達より、上学年の仲良しの子から教えてもらう方が分かりやすいなど、かかわる中で喜びや発見が生まれる。
- 普通の授業からの逆の発想ができる。「誰かが気の利いた答えを言い、教師が上手くまとめ、理解していない子がいるのに、みんなが分かったような雰囲気になって終わる、何となくいい授業」からの脱却。
- しゃべりすぎてしまう教師からの脱却。最低限の指示、発問によって子どもが活躍する場面をたくさん作りたい。教師がたくさん説明して分からせようとしている時間、子どもはそれを我慢して聞いているだけになりがち。それより、分かるまでとことんやる子を育てたい。たくさんアイデアが集まる場で、何を使っても、誰に聞いてもいい条件で、主体性を育てたい。生きる力へ繋げたい。
- 誰も見捨てないクラス（集団）づくりができる。できない子、動かない子、不真面目な子を叱ったり、促したりしない。その子を黙認している、集団を叱るべき。
- 何が分からないのかを言える子ども、分かるまで動いて解決しようとする子を育てることができる。分からない子に分かりやすく教えたり、教えるのを止めて見守ることが効果的な瞬間に気付いたりする、高学年の姿が期待できる。
- 分かるとは、解けることではなく、解き方を説明できることだと伝えることができる。

②教師の役割は…??? 授業中に何をすればいいのか…???

- 子どもの声に耳を傾ける。教えない。子どもをよく見取る。クラス算数では、教師が主体で授業を進めることが多く、子どもをなかなか見ることは難しい。また、まだできていない子ではなく、できた子をどう関わらせるかに視点を当ててコーディネートする。教師はしゃべっていい。子どもと子どもを繋げる。そして、授業後はノートからも子どもを見る。放任ではなく信頼。
- 課題の工夫（教材研究・人間関係の把握）環境の整備（子どもが使える物を準備）
- 振り返りで、子どもの姿を価値付ける。

③週1回の全校算数では、算数の時数が足りなくなってしまう…

→1学期の全校算数は、H25の校内研究計画により行う。9月からは、週1回、毎週木曜日に行う。ただ、全校が必ず参加する日を月1回、その他はフリー参加とし、無理のないように参加する。

④どのような課題がいいのか???

→多様な考えが出るもの。最初に解き終わる子が10分ほどかかる程度の難しさ。意図的に、つまずきや、やりにくさを作るとおもしろい。課題づくりの力を付け、磨くための週案。どんな課題でも子どもが解決すると信じる考え方もあるが、姫小では、教師が子どもに対して行う支援とする。

⑤ネームプレートの活用は、どのように捉えたらよいのか???

→全校算数の回を重ねるごとに、子どもたちは自分のネームプレートが裏返ったかどうかを気にしなくなる。「まだできていないことが恥ずかしい」の気持ちをこえていく。「まだできていないのか」と馬鹿にする集団にはいけない。その子に対して、自分は何ができたかを問う姿勢をもたせる。プレートをひっくり返した時に、みんなが「おめでとう！」と言う人間関係を作りたい。また、時に、課題の難易度を下げてみんなができるようなものを混ぜて、全員達成の場面を意図的に作る。課題で加減する。

⑥算数だと、教室の「教える、教えられる」の関係がそのまま出てしまう…???

→課題作りで、教師が工夫できる。逆転現象が起きるものがある。

EX) 1年生ならではの見え方で、6年生が気付くような課題。計算の正確性やスピードが優れている子より、気付きや説明の仕方が巧みな子が生きるような課題。いつも教えられる立場の子でも、低学年に教えることができ「ありがとう」と言われる場面づくり。などなど。

⑦望ましい子どもの姿とは…???

→意欲的に動く子ども。聞きに行ったり、教えに行ったり。

→「〇〇まで分かったけど、△△が分からない」とノートに振り返りを書く子ども。

→授業後に「疲れたけど面白かった」と言う子ども。疲れるほど考え、教えに動いた証拠。

全校算数に取り組み始めた最初の「学びプロジェクト通信」です。

この頃の「学びプロジェクト通信」は、全校算数を実施する意義や課題づくり、教師の手立て、子どもたちの姿など、全校算数のふり返りのときに出された教員の疑問とそれに対する答えを共有するという形になっています。教員も子どもと必死になって、全校算数をより良いものにしていこうと励んできました。

学びプロジェクト通信

H25・6・10 学びプロジェクト

第2回全校算数の振り返り

—気付いた子どもの姿—

- ・3年生のKさんが「教えてあげる？」と1年生に声をかけていた。
- ・4年生のMさんと5年生のYさんが連携して、1年生のYさんに説明していた。
→困っている友達を見付けられる姿を褒め、その姿を広げる。他の子も真似るようになる。
- ・「どうやって見付けたの？」…子どもの言葉だからこそ、説明を促すことができた。「説明して」は大人の言葉。

①場の設定は大切！

→図書室とPC室の間にある仕切りが壁となる。最初は机に付かせず、前に集め、課題を渡してからフリーにする方が、異学年の交流を促せる。→子どもが相手（説明が自分に合っていて分かりやすい相手。一緒に勉強して心地よい相手）を選んで学ぶようになるまで、待つ・育てる。

②いつもネームプレートが最後までひっくり返らない子がいる・・・

→最後まで教えていた子どもを褒める。できる・できないにかかわらず、努力した子どもの姿を褒める。いつもプレートがひっくり返らない子がいたら、全員が達成できるような課題に取り組む日をつくってもよい。また、早く終わる子に対して、課題の条件を増やしたり、ハンディを課したりして、課題で加減することができる。できないことを気にしないように仕向けていく。できないままにいる子を放っておかないクラスにしたい。

③みんなが課題を達成するには時間的に厳しい・・・

→最初から課題を出しておき、来た人からノートに写す方法。
→できたら子ども同士で見せ合って丸付けをする方法。間違っていたり、写していたりするだけの子もいるかもしれないが、時には、「いつかどこかで気付く」という大らかさで、まずは子どもを信じて試してみたい。定着しているかどうか心配な時は、数字だけを変えた確認テストを用意して最後にやらせる方法も。

- ・1、2年生は、未習の課題に取り組んだ。「分からない」「教えて」など、自分で言えることにも価値がある。
- ・課題が良かった。段階があること、レベルがあること、教科書の進度に合っていたこと、
- ・次回から、担任の先生が課題をホワイトボードに書いて持ってくるやり方でも入れていきたいなと思っています。

～西川先生より～

- ・「全体を見てみよう」と投げかけよう！
→自分で「誰に教えに行けばいいか」を考えて教えに行くようになる。ネームプレートを見て、手分けして教えに行くようになる。→その姿を褒めて、さらに広める。
- ・「時間は守る」を守ろう！

2回目の「学びプロジェクト通信」。

全校算数に取り組む子どもたちの姿に教員側も本音や気付き、困った点などを打ち明け、西川先生にアドバイスを求めました。

子どもたちだけではなく、教員間でも全校算数に対する共通理解を図ると同時に、1つのことに向かって積極的なコミュニケーションを図る、その一歩がこの通信の中に垣間見えます。



次は9ヶ月後！

学びプロジェクト通信

平成 26 年 3 月 3 日 N o 16



課題を達成した後は…？



全校達成！

職員の振り返り ～支援Pの先生より～

平成 26 年 1 月 23 日

- Aさんが学習時間が終わっても、手を止めずに課題をようという姿勢が見られてよかった。
- 箱の大小のくらべる時、違う言葉を使いながら説明している姿があった。
- 教え方について、答えをそのまま教えている姿があった。そのことを伝えると、3年生のBさんは相手を考えて教えようとしていた。また、応用問題を出す姿もあった。このように、教員から投げかける姿があってもいいのではないか。
- ★説明するシリーズの課題について。全校算数において、友達にわからないところを説明することは必要だが、自分がやったことを説明するのはかかわりが少なくなることもあるのではないか。それは、むしろクラス算数でしていくことではないか。全校算数のときの課題は「説明する」ではなく、「できる」などにしたほうがよいのではないか。
- ★2年生の達成率悪かった。言葉の例示が必要だった。全校でやる場合は、全校でかかわれるような課題を作成する必要があった。

支援Pより

もしも「～を説明する。」という課題を設定する場合は、教員側が説明の解答例を置いておくことが有効です。評価規準を示すことで、児童も〇つけができるため、列になってしまうことを防ぐことができます。

平成 26 年 1 月 30 日

- CさんがDさんに、ボードを使って教えた。
- 3年生は問題数が多かったか。とりあえず1ページに抑えておいて、様子を見て補充する小出し方式がいいのかもしれない。
- 5年生は理由を納得するまでやった。
- 6年生は担任が喝を入れた。動き始めた。
- Eの経験からの助言が、5年生にとってのヒントになった。
- 1年生の課題が易しかったので達成が早く、時間を持て余していた。→1年生を集めて補充問題を出した。

平成26年2月13日教員ふり返り

- ・ **終わった後の子どもの過ごし方**が気になる。以下のような行動を選択肢として例示してはどうか。
早く教えに行く。問題を出し合う。自分の考えを聞いてもらう。相手の考えを聞く。次の問題をする。
- ・ 1年生が集中力が切れてしまい、他の人の説明が入ってこなかった。Fさんがホワイトボードを使ったり、5年生が本を使って例示したり、わかりやすい説明をしていた。
- ・ 1年生の問題の解答例と子どもの解答が別になってしまい、子どもが丸付けするのをためらってしまっていた。判断できない場合は、他の学年に判断してもらうなど動けると良い。

平成26年2月20日

- ・ 今回は、2時間目だったこともあり、児童の頭の回転が早かった。
- ・ **終わった後の時間の使い方**を考える必要がある。2年生のように**ホワイトボードを使って問題を出し合う**など、良い時間の使い方をしたい。
- ・ 時間に余裕があったため、**2年生は5年生に問題を出してもらおうとする**など、自分たちだけでやるのではなく、かかわろうとする動きもあった。時間に余裕があったためだろう。
- ・ 課題が終わったら、**確認のミニテスト**を使う場合もある。そのような方法も試してはどうか。
- ・ 全校達成した場合の終わり方について、共通見解を取る必要がある。
→ 全校達成した場合、一度止めて思いっきり褒めてはどうか。そのあと、残り時間の過ごし方について指示をするという形で進めたらよいのでは？

平成26年2月27日

○課題を達成した後の使い方

- ・ 2年生…自分たちからカードを持っていくことを提案してきた。自分たちで終わった後に何をするか考えていた。何をするか見通しを持っていた。
- ・ 5年生…**カードを用意**したら、子どもが発展問題などを作りあって、時間を使っていた。
- ・ 6年生…事前に、「**全校達成したならば次に進む**」、「**問題を出し合う**」ことを提案した。

○6年生の姿

- ・ 自分の課題を後回しにして、下級生に教えに行く良い姿が見られた。
→ 他の学年も、このような姿があることを褒める。6年生だけが担うのではなく、どの学年も全校達成に貢献するように伝える。6年生の姿ばかり伝えると、6年生に負担がかかりすぎて、課題を達成できない場合もある。

※「**教える子を褒めたら、教わった子も褒める。両者は一体です**」西川先生より

○アドバイスについて

- ・ 4年生…ヒントの与え方に差がある。自力でとことんやる態度を身につけさせたい。
- ・ GさんはHくんに、あの手この手を使って教えていた。「例え」などを使って、その子にあった説明をしようとしていた。
→ 4年生の事例に関しては、具体的に子どもたちに伝えてあげると良い。問題があれば、子どもたちに返し、子どもたちにどうすれば良いか考えさせていけると良い。

○参観者の先生から

子ども達がダイナミックに動く。6年生が先に他の学年を教えているのがわかった。最後に集中して、6年生がリードしているのがわかった。教員が教えている場合は、最後まで教えてしまう。子ども達はちょっと教えて、そのあと子ども達に任せる。それでわかっていなかったら、他の子どもが教えに行く。教えすぎないということを学んだ。

取り組み一年目の冬、分かりやすい教え方を考えたり、課題に意欲的に取り組んだりする子どもたちの姿が多く見られるようになりました。その一方で、高学年がリードして動くという雰囲気があったようです。全校達成するためには、子どもたち一人ひとりが全校達成に貢献するように伝えることが大切であると実感しました。

また、子どもたち同士のかかわりが生まれるような課題づくりや時間の有効な使い方などに悩んでいました。

学びプロジェクト通信

平成 26 年 9 月 8 日 No6

2学期最初の全校算数



※ネームプレートを見て、Aさんが終わっていることを知り、頼ってやって来ました。
スペースがあったことで3人は動きやすかったのかもしれないね。





振り返り

マイクを使い、立ち位置を考えて発表できていましたね。あとは、「へそ」を向ける聞き方が定着していくといいですね。

Bさんからは「良いスタートが切れました」との振り返りがありました。

1学期、高学年がグループの話し合いをコーディネートする姿が印象的でした。今回は、「仲良し班で話し合い ver.」の振り返りを行ってみたいと思います。

課題

今回、学年の課題が比較的軽いものとなっていたせいか、空いた時間を持て余す子どもたちの姿が目立ちました。(終わった子ども全員に教える相手はいない…)

私たちのコーディネート方法は…



- * 「ステップ1」が達成できたら「ステップ2」というように、課題を段階的に設定しておく。
- * ホワイトボードなどを用い、類似問題を作って解き合う。
- * 同じ学年同士で、やり方を比べる。
- * 余った時間をどう使うか、アイデアを子どもたちに求める。考えさせる。

などのような方法がこれまでにできてきましたね。

「時間の使い方」は、今後も、検討していかなければならない課題ですね。

今年度の2学期からは10月の学習発表会に向けて、図書室から体育館に会場を変え、全校算数を開始しました。場所を変えても、子どもたちはいつもと変わらぬ様子で学び合っていました。そして、2学期初回から全校達成という幸先の良いスタートを切ることができました！

学習課題の変遷

2013年9月5日

<p>1ねんせいのかだい</p> <p>①いろいろなかたちをうつして、えをかく。</p> <p>②どんなかたちをつかって、えをかいたかを、5にんにせつめいして、サインをもらう。</p> <p>※ただし、1ねんせいがい。</p>	<p>9/4 全校算数 2年生のかだい</p> <p>○「天気しらべ」のけっかを みんながひょうやグラフに あらわし、もんだいをとける。</p> <p>○見やすいグラフ にするための くふうを みんなが できるようにしよう。</p>	<p>3年生のかだい</p> <p>①教科書P.99の4の問題をやりましょう。どうして、その数になるか理由を書きましょう。3年生全員が分かったら、みんなで、つじ先生の所にノートを持って来ましょう。</p> <p>②教科書P.99のれんしゅう をやりましょう。1は、漢字で書きましょう。</p>
<p>課題 4年生</p> <p>103ページ①を、みんながわかって、書けるようにする。(2つの折れ線をかくのです)</p>	<p>5年生の課題</p> <p>★全員が問題を解けるように、みんなでお話し合おう。</p> <p>★解き方を友達と説明し合い、自分とちがう解き方を見つける。</p>	<p>課題 6年生</p> <p>進んだ道のりや、かかる時間の求め方を考え、みんなが分かるようにする。</p> <p>P94の1、2を図、式をかいて求め、みんなを納得させる説明をする。</p>

2013年12月19日

<p>1ねんせいのかだい</p> <p>とけいを正しくよんだり、かいたりできる。</p> <p>・プリントをやる。</p> <p>・図の②は、「ながいはり」「みじかいはり」のことばをつかって、1ねんせい1人と、ほかのがくねん1人にせつめい。サインをもらう。</p>	<p>12/19 全校算数 2年生のかだい</p> <p>点をむすんで海の生きもののかこいを作ろう。</p> <p>やくそく・直線でかこむ。</p> <p>・線が生きものにかからないように引く。</p> <p>・できるだけ少ない直線でかこむ。</p> <p>点と点を直線でおすんで、いろいろな三角形や四角形をかきましょう。</p>	<p>3年生のかだい</p> <p>表とグラフの問題が分かる。</p> <p>①教科書P.59の力だめしの問題をやる。</p> <p>②終わったら、3年生以上の友達に丸つけをしてもらおう。2番は書いたことを言葉で説明する。</p>
<p>課題 4年</p> <p>小数のかけ算、わり算の文章題をとくことができる。</p>	<p>12/19 5限 ◎5年生の課題</p> <p>4つの図形を折り紙で作り、共通点と相違点が分かる。</p> <p>P54・55 (準備) 分度器・じょうぎ・はさみ・のり</p>	<p>4けたの整数24個の平均を求めることができる。</p> <p>①1357の4つの数字を並べてできる4けたの整数を全て書き出す。</p> <p>②平均を求める。</p> <p>※分担、電卓OK</p>

2014年4月16日

<p>1ねんせいの かだい</p> <p>1と2と3と4のすうじをかき、すうじとおなじかずのいろをぬることができる。</p> <p>・「たのしいおけいこ」にかく。 ・ほかのがくねんのひとに、まちをもらう。</p>	<p>4/16 2年生のかだい</p> <p>○100より大き いかずをよんだり かいたりできる。</p> <p>◇P15 かんじのつづき(3)まで。</p>	<p>18 3年生のかだい</p> <p>答えが653になる 3けたどうしのたし算 の筆算を作る。</p> <p>筆算は3つ作る。 ①くり上がりなし。 ②くり上がり1回。 ③くり上がり2回。 3年生～6年生に計算してもらおう。 筆算が正しく書けていたら、サイン をもらう。</p>
<p>課題 4年</p> <p>大きな数を数直 線上に表すこと ができる。</p>	<p>課題 5年生</p> <p>計算で平均を求め ることができる。</p> <p>☆教科書 P172～18</p> <p>↓ おまけ</p>	<p>4/16 ◎6年生の課題</p> <p>◆対称な図形の残り半分 をかく。</p> <p>◆どのようにかいたか友だ ちに説明する。</p> <p>◆P15</p>

2014年9月11日

<p>1ねんせいの かだい</p> <p>②まとめてかぞえる かぞえかたがわかる。</p> <p>1と2と3と4のすうじをかき、すうじとおなじかずのいろをぬることができる。</p>	<p>9/11 2年生のかだい</p> <p>1Lますや1dL ますのめもりを 読むことができる。</p> <p>・P101、3102をノートに書く。</p>	<p>9/11 3年生のかだい</p> <p>数直線の読み方や数 の大きさをくらべが わかる。</p> <p>★教科書P.101、102</p> <p>①はやくせん。</p>
<p>課題 4年 p.111</p> <p>四捨五入して がい数にする問題 がとける。</p>	<p>課題 5年生</p> <p>学習したことをいかして 倍数と約数の問題を解 くことができる。</p> <p>ステップ1 教科書 P115 1～3 ステップ2 ドリルや問題の出し合い</p>	<p>9/11 ◎6年生の課題</p> <p>おうぎ形の面積を求め る。</p> <p>P73</p>

全校算数を開始したとき、課題づくりに悩みを持っていました。課題づくりについて職員室で相談をしたり、授業後の協議会で反省をしたりするなど、より良い課題設定のために努力する日々が続きました。今では、課題づくりのコツをつかみ、課題も昨年と比較すればシンプルなものに変容しました。



昨年度 西川研究室支援報告

自分の考えを表現し、かかわり高め合う授業づくり

姫川原小学校支援チーム
西川 純（アドバイザー）

要約

姫川原小学校における支援の目的は「自分の考えを表現し、かかわり高め合う授業づくり」である。全校算数と単学級『学び合い』の授業づくりを支援した。その結果、授業の中で説明し合う活動を通して、思考力・表現力とコミュニケーション能力が向上した。

キーワード 『学び合い』、全校算数、表現、かかわり

I はじめに

1 支援校について

姫川原小学校は学級数 6、全校児童 63 名、教員（教育補助員を含む）11 名の小規模校である。教育目標は「豊かな心をもち、意欲的に学び、たくましく生きる子ども」であり、重点目標は「心をつなぎ みんなが伸びる学び」としている。当校では次のような学校課題を抱えていた。

学力面では、自分の考えを積極的に表現することが苦手な児童が多く、算数に苦手意識をもっている児童も多い。そこで、思考力・表現力を高めるために、算数で児童が互いに学び合う授業づくりを目指していた。

コミュニケーション能力の面では、平成 26 年度に閉校になり、大規模校と統合されることから、多人数の集団の中でも自己表現できる力を育てる必要があった。

2 支援の内容

今年度より、本支援チームは、当校の掲げる「自分の考えを表現し、かかわり高め合う授業づくり」を課題に据え、支援に取り組んだ。本支援チームでは、「かかわり高め合う」とは、説明し合うことを通して、学習意欲や思考力・表現力を高めることと考えた。そこで、『学び合い』¹⁾の考え方を取り入れた全校体制での算数授業（以下、全校算数）と、単学

級での『学び合い』授業づくりを中心とした支援を行った。その中で出てきた教員の悩みの解消や、『学び合い』を通した不登校児童への対応についても支援し、分析とフィードバックを行った。

『学び合い』とは、学習者集団に達成目標となる学習課題を設定し、教師による直接的な指導を減らすことにより、学習者同士の主体的で自由なコミュニケーションを中核として学習を進める学習形態である。

II 支援の実際

1 支援期間

平成 25 年 9 月～平成 25 年 12 月

2 支援の経過（主なもののみ記載）

8 月	・校内研修への参加
9 月	・全校算数（毎週木曜日実施）支援 ・6 年単学級『学び合い』授業支援
10 月	・全校算数（毎週木曜日実施）支援 ・5 年単学級『学び合い』授業支援 ・6 年単学級『学び合い』授業支援
11 月	・全校算数（毎週木曜日実施）支援 ・5 年単学級『学び合い』授業支援 ・6 年単学級『学び合い』授業支援 ・5 年 6 年異学年合同『学び合い』算数支援 ・宿泊体験活動にて全校算数支援

12月	<ul style="list-style-type: none"> ・全校算数（毎週木曜日実施）支援 ・5年単学級『学び合い』授業支援 ・6年単学級『学び合い』授業支援 ・5年6年異学年合同『学び合い』算数支援
-----	--

3 主な支援内容

(1) 全校算数への支援

- 授業前の支援
 - ・教室設営
 - ・教材コーナー設置
 - ・「算数ことば一覧」掲示
 - ・学習課題設定への助言
- 授業中の支援
 - ・教員との情報交換
 - ・「可視化」「語り」の例示
- 授業後の支援
 - ・授業直後の協議会への参加
 - ・教員の振り返りのまとめ
 - ・児童の振り返り一覧表の作成
 - ・児童の発話等データ処理、分析
 - ・児童及び教員へのアンケート作成、実施、集計、分析
 - ・データ分析結果の教員へのフィードバック



(2) 単学級への支援

- 授業前の支援
 - ・単元課題一覧表の作成
 - ・学習課題におけるアドバイス
- 授業中の支援
 - ・教員との情報交換
 - ・「可視化」「語り」の例示
- 授業後の支援
 - ・教員との情報交換

4 調査方法

- ・授業中、教室内にビデオカメラを2台置き、児童と教員一人ひとりにボイスレコーダーを装着して、映像と音声を記録した。
- ・月に1回、児童と教員に全校算数についてのアンケートを実施した。
- ・全校算数について、教員にインタビューを行った。

III 支援の成果

1 全校算数の取組による結果と考察

(1) 思考力・表現力の向上について

① 結果

- i 9月～11月の各月1回の授業において、5年生3年生1年生の各1名の児童を抽出し、音声記録及び映像記録より量的に分析した。音声記録より、授業における「説明」をしている時間の割合を分析したところ、表1のとおりとなった。

表1 「説明」をしている時間の平均

	9月	10月	11月
説明時間	1分48秒	3分24秒	3分52秒
学習時間	39分16秒	35分1秒	28分23秒
説明の割合	4.6%	9.7%	13.6%

また、「説明」をしている回数（説明をする発言もしくは会話が、途切れるまでを1回とカウント）を分析したところ、表2のとおりとなった。

表2 「説明」をしている回数の平均

	9月	10月	11月
「説明」の回数	3.7回	4.7回	6.3回

この結果より、9月に比べ11月は「説明」する時間の割合及び回数のいずれも増加したことがわかった。

さらに音声記録より、会話を質的に分析したところ、以下のような事例が10月と11月に見られた。

事例1は、5年生A児が同学年の児童と問題の解き方を説明し合っている発話である。なお、発話は、内容がわかりやすいように一部修正して記載する。(以後示す事例も同様)

【事例1：算数用語[※]を使った説明①(A児)】

※算数の知識として押さえてほしい言葉を指す(以下同様)

バスは9分おきに発車しているから9の倍数を丸で囲んだのね。こっちは6分おきに発車しているから6の倍数を丸で囲んだのね。それで、重なった54が公倍数だから、8時と54分を足して、8時54分になりました。

ここでは、「倍数」「公倍数」といった算数用語を使うとともに、「○分おきに⇒○ずつ数が増える⇒○の倍数」と数学的な考え方をを用いて説明していた。

事例2は、「ガムが12個あります。6人で9個食べました。残りは何個でしょうか」という問題について、5年生A児が1年生児童にその解き方を教えている発話である。1年生児童は式に「12, 6, 9」の全ての数字を使おうとしていた。

【事例2：算数用語を使った説明②(A児)】

答えの単位は「個」でしょ。「6」は「人(にん)」だから関係ない。何人いようが9個食べたってこと。「の・こり・は」なんこでしょうかってあるでしょ？だから何算？

ここでは、単位や「のこり」という算数用語を使って教えたり気付かせようとしていたりしていた。

事例3は、足し算の式を立てて答える文章題について、A児が1年生児童に演算決定を導いている発話である。

【事例3：相手の様子に合わせた説明(A児)】

A児：文章に「合わせて」って書いてあるよね。だから、これとこれをたすんだよね、「合わせて」だから。じゃあ足して。・・・足すと一、何になるかね？

1年：12たす6

A児：12たす6は何になるかわかる？・・・

Gちゃんの手を使ってもいいから。(後略)

ここでは、「これ」と言いながら、教科書やノートを指さし、視覚的にもわかりやすいように説明している。また隣にいる5年生G児の手(指)を使うこともしていた。この時、随時1年生児童の表情を確認しながら説明している様子も見られた。

事例4は、自分の学習課題を終えた3年生B児が、同学年児童の間違いの所在について確認している様子である。

【事例4：間違いの所在を確認する様子(B児)】

B児：…ん？…470m？……これ470？

3年：470。

B児：…えー…470mじゃなくてー、……20mなんだよ。これ。(中略) たった20m違うだけ。…どうやって計算した？……足し算してる！足し算してるよここ。20+50じゃなくてー、差を出すんだから引き算するんだよ。

ここでは、ただ答えを教えたり、「合ってる」「違ってる」と言ったりするだけでなく、間違いの原因を見つけて指摘する姿が見られた。

- ii 9月と11月に1回ずつ行った全校算数についてのアンケートを分析した。「説明することへの意識に関わる結果は表3・4のとおりである。なおアンケートは4件法で、「はい」「少しはい」を「肯定的な意見」、「いいえ」「少しいいえ」を「否定的な意見」として捉えた。

表3 質問【私は相手にわかりやすく自分の考えを説明しています】の回答結果

	9月	11月
肯定的な意見	81%	90%

表4 質問【私は一つの考え方で解くだけでなく、ほかの考え方で解こうとしています】の回答結果

	9月	11月
肯定的な意見	72%	82%

表3・4より、両質問とも9月に比べて11月では約10ポイントの向上が見られた。

- iii 全校算数実施後に行った教員へのアンケートとインタビューを分析した。アンケートの内容は「全校算数で見られる子どもの姿」や「運営面での手ごたえや悩み」などと自由記述である。インタビューは、アンケートの回答について詳細を聞いた。

アンケートの記述とインタビューの回答の一部を事例5・6・7に示す。

【事例5：2学年担任のアンケートより】

聞き合う姿がふえた。自分の考えを言おうとする姿が多くなった気がする。

【事例6：1学年担任のインタビューより】

子どもはすごく対話している。全校の場が生きていることをすごく実感した。だから、全校算数で鍛えられた対話をクラス算数でいかすみたいな感じになってきたかな。

【事例7：5学年担任のインタビューより】

5年生のC児は最初、説明がしたいんだけど、「僕がうまく説明ができないから回れない」って言っていた。それが、C児が一人で低学年に、自分の言葉で見つけて、説明して、低学年にわかってもらった嬉しさや、一人でも役に立ったという気持ちを感じることができていた。

②考察

全校算数の取組において、「説明する」回数や割合の分析結果から、「説明する」ことを通して、自分の考えを表現する機会が多く設けられたことがわかる。またその内容においても、前掲の事例1～4にあるように、相手に理解で

きるようにするために、算数用語を使ったり、相手の様子を見ながら教えたりと、思考・表現している様子も多くうかがえた。また児童への「説明する」ことへの意識をはかるアンケートの結果から、説明することへの意識が高まったことがうかがえた。さらに、教員も児童の表現する意欲や力の向上を認めている。

これらのことより、全校算数の取組が、児童の思考力並びに表現力の向上の一助になったと考察する。

(2)コミュニケーション能力の向上について

①結果

- i (1)と同様にして、音声記録及び映像記録より、会話を質的に分析したところ、以下のような事例が10月と11月に見られた。

事例8は、5年生A児が、課題を終え歩いてきた4年生D児に対して行った発話である。この時5年生A児1人が2人の児童にかわるがわる教えている状況だった。

【事例8：教える側として助けを呼ぶ様子(A児)】

Dカモン。D来て。カモンD。ここ困っている人2人いるよD。2人だと私だけじゃ厳しいから、助けに来て。

ここでの助けを呼ぶ発話においては、全員の課題達成に向けて大切なコーディネートをしている姿ともいえる。

事例9は、「他の1年生に問題の解き方を説明する」という学習課題がある1年生児童に対して、5年生A児が説明をしにいくように促す発話である。

【事例9：説明することを促す会話(A児)】

A児：説明してきていいんだよ。てゆーか、他の1年生に説明しておいで。

1年：だって誰も終わってなくて(説明できない)・・・。

A児：大丈夫。誰でもいいから説明しておいで、終わってなくてもいいんだよ。その人が終わってなければ教えることになるから逆にいいんだよ。いつてらっしゃい。

A児は1年児童に自分の考えを説明させて自身の課題達成に近づけるとともに、他の児童とかかわらせることで、仲間の課題達成も促している。この行為は全校児童全員の課題達成に向けての大切なコーディネートでもある。

事例10は、自分の考えをノートに書いた後、担任教師に説明するために順番を待っている際の、3年生B児の会話である。B児は待っている時間を利用し、同学年児童に計算方法を教えている。

【事例10：教えることを仲間に依頼する様子（B児）】

B児：まず、2つある式の、どっちなかの計算して、次に残った方の式の計算をして、それからでた数の差を・・・
 3年：Bさん。Bさんの番だよ。
 B児：あつ！はい。・・・ちょっと・・・教え・教えといってくれる？

この会話のように、自分が教えられない状況になった時に、教えていた仲間を見捨てず、他の仲間の力を借りて教おうとしている姿がみられた。これは、1対1でのかわりに固執せず、仲間同士のかかわりを広げていると考察する。

ii (1)と同様、全校算数についての児童へのアンケートにおいて、「コミュニケーション能力」に関わる結果は表5・6のとおりである。

表5 質問【私は困っている人がいたら進んで助けています】の回答結果

	9月	11月
肯定的意見	87%	96%

表6 質問【私はわからないことがあったときに、いろいろな人に「教えて」や「助けて」と言っています】の回答結果

	9月	11月
肯定的意見	84%	88%

表5・6より、いずれの月においても、各質問で高い数値を示している。

iii 同アンケートでの自由記述の一部を事例11に示す。

【事例11：児童のアンケートの記述】

〈2年女児〉：わたしが、こまっているとき、「わかる？」「おしえてあげる？」など声をかけてもらってうれしかったです。なぜかと言うと、わたしがたっせいできるためにがんばってくれるんだなと思ったからです。

〈4年女児〉：上の学年の人から教えてもらってうれしかったです。他の学年に教える時にもその学年の人がわかるような説明をすることができました。

〈2年男児〉：きょうのかだいですがすぐにおわったからいろいろな人におしえてあげたのでよかったです。

〈4年女児〉：今日の全校算数では、いつもとちがう人とすわって、いつもとちがう人に教えてもらえたのでよかったです。

〈6年男児〉：今日はあんまり人に教えることができなかった。でも、はやくおわってよかった。自分から、「教えて」もいえた。でも、それは6年生に知っているから、他の学年に「教えて」、「助けて」といいたい。

これらの意見のように、「教える側」「教えてもらう側」のどちらにとっても「良かった」と感じる児童が多かった。また、仲の良い仲間とかかわるだけでなく、困っている人へかかわろうとする姿勢や、困った時に素直に助けを呼べる姿勢が育っている様子がうかがえた。

iv (1) iiと同様の教員へのアンケートにおいて、「コミュニケーション能力」に関わる記述は事例12・13・14のとおりである。

【事例12：4学年担任のアンケートより】

教え合うというかわりにより、感謝・思いやりの心が育っている。やさしさを基盤とするかわりが生まれた。

【事例13：5学年担任のアンケートより】

わからない友達のところへ行って、声をかけたり、教えたりする姿が増えた。

【事例14：教頭のアンケートより】

学び合いを通して、積極的にかかわる姿が見られるようになった。

これらの意見から、全校算数で見られる児童の姿から、コミュニケーションへの積極性やコミュニケーションによる効果を実感していることがうかがえた。

②考察

全校算数の取組において、自由に教え合い・学び合いをする活動を通して、前掲の事例8～10にあるように、困った相手に声をかける姿勢や、困った時に素直に人に聞ける姿勢が育ってきている。これらは、自分からかかわろうとする意欲やコミュニケーションのスキルが高まった成果であると考え。さらに自分以外の人と人とのかかわりをコーディネートする姿も見られるようになった。このことから、集団のコミュニケーションを活性化させる意欲やスキルも高まってきていると考える。

また、児童と教員対象の、全校算数についてのアンケートの記述から、多くの児童が教えたり教えられたりという活動に意欲をもち、人とかかわることにおける反省や、それを改善する目標を持っていることがうかがえた。

このことより、全校算数の取組が、児童のコミュニケーション能力の向上の一助になったと考察する。

(3)教員の悩み解消について

①結果

当校では一学期に任意参加で異学年合同算数授業を行っていた。一学期末には以下のような学級担任の悩みが見られた。

- ・課題の設定について…5人
- ・授業の進度について…3人
- ・教師の役割について…3人

上記の悩みをどのように解消したのか、(1)

iiiと同様のアンケートとインタビューを分析した結果、以下の事例15～18に見られるような記述や発話が見られ、当初の悩みの解消がうかがえた。

【事例15：「課題・悩みを共有」に関わる発話】

課題についての話を前日にこんなんでもいいかなとか、改善の方法で話題が出ています。

【事例16：「実践の学び合い」に関わる発話】

他の学年の課題の出し方を見て、授業の流れで課題を決めて良いっていうのがわかった。

他の先生方の声掛けを見ていくうちに、こういうふうに声をかければいいとわかった。

【事例17：「成果を確認」に関わる会話】

学級の人間関係が固定化していたんです。それが、変わってきたのが大きな成果だった。

4年生は自尊感情アンケートの結果がものすごく上がったんです。6年生も自己受容感覚の数値が上がっている。成果があったんじゃないかな。

【事例18：「協働性を発揮」に関わる振り返り】

職員の所属意識を高め、チームとして全校算数に取り組んでいるという意識を高めてきた。

②考察

全校算数実施当初は、新しい学習形態に戸惑い、課題設定や授業の進度、教師の役割などの悩みが見られた。それらの悩みを共有しながら実践していくことを通して、「教員集団で課題・悩みを共有」し、「実践を学び合い」、「成果を確認」する、というサイクルによって「協働性が発揮」され、悩みは解消されたことが明らかになった。

2 単学級『学び合い』での取り組み

5年生の単元テスト成績の向上について

①結果

算数の単元テストについて、『学び合い』授業実施前の9単元の平均点と、『学び合い』授

業で行った2単元の平均点を比較したものを表11に示す。なお、テスト結果は100点満点に換算した。

表11 『学び合い』実施前後の単元テストの平均点と平均点の差(点)

児童	実施前	実施時	差
児童I	90.0	98.3	+8.3
児童J	95.9	100.0	+4.1
児童K	80.7	93.3	+12.6
児童L	98.1	100.0	+1.9
児童M	88.2	93.3	+5.1
児童N	77.5	93.3	+15.8
児童O	87.9	90.0	+2.1
児童P	99.6	100.0	+0.4
児童Q	94.3	100.0	+5.7
児童R	98.0	100.0	+2.0
児童S	90.2	95.0	+4.8
平均	90.9	96.7	+5.8

②考察

『学び合い』授業実施前と実施時の単元テストの平均点を比較した。テスト得点について、分散分析を行った結果、群の効果は有意だった($F(1, 10)=15.64, p<.01$)。これは、「みんなが納得できる」まで課題解決に取り組んだり、「みんなが課題達成できるように」と児童が進んで復習や予習に取り組んだりした成果が表れたと考える。

IV 課題

全校算数中の児童の観察から、ある教員は「学級で見せる姿と全校で見せる姿の違い」に気付いた。学級では活発に友達とかかわって活動する反面、全校算数では他の児童とかかわりに積極性が見られないというものだった。また、学級でも全校算数でも自分からかわることができない児童も存在する。別の教員は、課題達成にこだわるあまり「わかったふり」で終わってしまう子の存在を指摘した。

この事例を校内研修会で取り上げたとき、

教員の中から「大規模校に入る前に自分からはたらきかけることのできる子に育てなければならぬ」「自分で納得するまで勉強できる子に育てたい」という意見が出た。

これらの課題を解決するための方策を提案することが今後の課題である。

V おわりに

本支援のテーマである「自分の考えを表現し、かかわり高め合う授業づくり」で、一定の成果を上げることができた。現在当校ではいくつかの取組を継続しており、今後も自分を表現しかかわり高め合う児童の育成を支援していきたい。

VI 引用・参考文献

- 『学び合い』の手引書(平成25年7月26日版), 西川純

VII 謝辞

今回、支援プロジェクトおよび研究にご協力いただきました姫川原小学校の荒川校長先生、職員・児童の皆様に感謝いたします。

2014年2月、西川研究室姫川原チームがまとめたプロジェクトセミナーの予稿です。

子どもたちの説明やかかわりの変容、教員の悩みの解消や5年生の算数の成績向上が明らかになりました。

全校達成への工夫



全校算数で、「どうすれば全校達成できるのか」・
「自分にできることは何なのか」に注目し、時間
内に子ども達全員がわかるようにするコツを
姫川原小学校で考えました。

**こうすると、時間内に、
みんなが、分かるよ**

**全校達成
のコツ**

ちがう学年で **自分より前に**
すわった **教えた**

教えてと言った **分かりやすく**
読んであげた

自分のやりな **いつも**
がら見てあげた **ちがう人に教えた**

「なかなか声をかけてやれ
ないんだよねあ・・・」

5年生の話し合い

- ・できた人をよんで、一緒に
考えてもらおう。
- ・高学年など分かりそうな
人に助けをもとめよう。
- ・答えを見て考えてみよう。

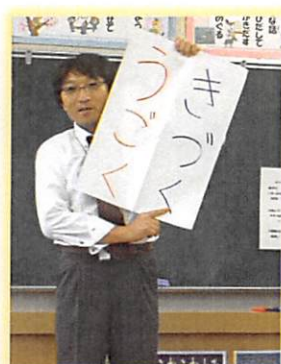
①自分にやれるのか心配。
→ん、でも一緒に
考えてみよう。

②自分の課題に目がいて
気づけない。
→ん、まわりを
見ながらやろう。

● 教え方名人その1
もんだい かだい
どんな問題(課題)
かをよく知ろう。
おし 教える人は、いきなり教えない。
まずは、相手をよく見よう。

● 教え方名人その2
かんが じかん
考える時間をあげ
よう。
おし 教える人は、一方的に話すのでは
なく、分かったか確認しよう。

● 教え方名人その3
さいご こた ほんにん
最後の答えは、本人
にいわせよう。
おし 教える人は、答えを言わない。答
えのを見つけ方を教えよう。



『学び合い』

心をつなぎ

みんなが伸びる学び



「ありがとう」



発行…新潟県妙高市立姫川原小学校
編集…上越教育大学教職大学院 西川研究室 姫川原支援チーム

- 編集後記 -

来年度の閉校に向け、姫川原小学校における全校算数の2年間の軌跡を多くの方に知っていただきたいと思い、この機会に本書を作らせていただきました。

私自身、姫川原小学校で支援する中で「一人も見捨てない教育・社会の実現」に向けて、歩み出すきっかけをいただき、充実した日々を送っております。

西川研究室はこれからも、「子どもに学ぶ」ということを通して、学校と共に歩み続けていきます。

(編集担当 M1 野田大貴)